

やっぱり  
漏れていた

# 原子力潜水艦から放射能

放射能漏れ中の寄港は、佐世保・5回、横須賀・1回、沖縄・5回。

## ◆米海軍が「最終報告」

日本にもたびたび寄港している原子力潜水艦ヒューストンが、放射能漏れを起こしていました。米国大使館が外務省に提出した米海軍の「最終報告」によると、①閉じられたバルブから放射能を含んだ冷却水が染み出した、②放射能が漏れていたのは06年6月から08年7月までの2年間、③冷却水に含まれる放射能はコバルト、④漏れた放射能量では人体・海洋生物・環境には影響がない——とのことです。また、「こうした例は過去50年以上存在しなかった」と述べています。今回の事故は、米国が初めて認めた、原子力艦船の放射能漏れです。

## ◆絶対に事故は起きない？

米国これまで原子力艦船の安全性を、次の様に説明していました。

- 原子炉に関係する何らかの問題が生じるという極めて想定し難い事態においても、少なくとも四重の防護壁が放射能を艦船の中にとどめる役割を果たす。
- 合衆国海軍は、いかなる予期せぬ事態が発生しても、これが検知され、迅速な対応がなされることを確保すべく、原子炉冷却水中の放射能のレベルを毎日モニターしている。

米海軍にとっては、絶対に起きない事故が起きたのです。しかし今回の事故で、4重の防護壁も、毎日のモニターも、役に立たないことが明らかになりました。

## ◆人体に影響なければいいの？

起こらないはずの事故が起きたのに、「最終報告」の記述は簡素です。放射能漏れを起こしたバルブは船のどの位置のものか、なぜバルブから放射能が漏れたのか、放射能漏れは人体に影響はないという根拠は何か——など肝心な事は書かれていません。

そもそも米国は、放射能漏れは起きない、万が一漏れても感知できる、としていました。ところがヒューストンは、2年間にわたって放射能漏れに気付かず、航行を続けていました。なぜ放射能漏れは感知できなかったのでしょうか。また、人体に影響がなければ、放射能漏れの責任は逃れられるのでしょうか。

- 朝長則男・佐世保市長  
「(報告内容に)疑問点があり、容認するかは言い難い。」
- 知念恒男・うるま市長  
「原潜は入ってくるなという地元の意向に反し、市民の期待を裏切る内容で、ずいぶん温度差があると思う。」

関係自治体首長の  
コメント

連絡先

# 原子力空母は安全ですか？

## 原潜ヒューストンの放射能漏れで出てきた数々の不安

### 米海軍の言い訳を信用できますか

原子力空母ジョージ・ワシントンの横須賀入港日は、9月25日が濃厚になってきました。

米国政府はこれまで、「原子空母は安全なのか？」という日本の市民からの問いに対して、海軍艦船の原子炉は4重の壁に守られており、放射能が艦外に漏出することはないと答えてきました。

ところが8月1日、原子力潜水艦ヒューストンからの放射能漏れが明らかになりました。米海軍の言葉を借りれば、「過去50年以上存在しなかった」事故が起きたのです。

想定しない事故が起きたのに、対応は簡単でした。1か月も経たない8月29日には、「最終報告書」を日本政府に提出し、「安全」を宣言したのです。しかし「最終報告」には、事故原因の詳細や、安全宣言に至る調査内容は記載されていませんでした。

全ての原子力潜水艦と原子力空母の運用を停止して、ヒューストンの事故個所と同じ部分の点検を行うことすらされなかったのです。



### ●不安1. 原潜放射能漏れの原因が不明

ヒューストンの事故報告書には、放射能漏れの原因が書いていない。ジョージ・ワシントンでも、同様の放射能漏れ事故が起きるのでは？

### ●不安2. 安全管理は大丈夫か

ジョージ・ワシントンは5月に、火災事故を起こした。消火に12時間かかり、修理のために、本国へ帰るほどの大事故。その原因は、禁煙エリアでのタバコの不始末。監督責任を問われて、艦長と副艦長が解任に。

### ●不安3. 乗務員の規律

横須賀へ向けた出向直前に、乗員2人が殺人容疑で逮捕。規律は保たれているのか。

### いまからでも遅くはありません

ヒューストンの事故後に、佐世保市やうるま市の議会は、「原潜入港拒否」決議を行いました。横須賀市でも、また東京湾一円の自治体でも、「原子力空母入港反対」の意思を示すことができるのではないのでしょうか。いま必要なことは、私たちが声を上げることです。



連絡先